令和４年度　いのちの授業　事例集（幼稚園こども園）【環境】

掲載数 50

	地区	学年	教科等	テーマ	内　容	参考事項（講師・教材等）
1	相模原市	年長	環境	いのちの教育『オタマジャクシとの出会いと別れ』	６月、オタマジャクシを飼育することになった。年長児が初めて見た時には泳ぐ様子に興味津々で、個体により色や大きさが違ったのでそれぞれに名前を付け愛着をもって世話をしていた。図鑑で調べてオタマジャクシの変態の様子を知ると驚く子が多かった。幼稚園の休み明けにオタマジャクシが１匹亡くなってしまった。もうすぐ後肢が出そうで楽しみにしていたので、泣く子もいた。餌をあげすぎたのか、水が良くなかったのか、どのようにしてあげたらよかったのかを子ども達は話し合い考えた。オタマジャクシの死を経験したことで、命を預かるという責任や小さな命の重さを知った。	教材は「うまれたよオタマジャクシ」（岩崎書店）
2	相模原市	年長	環境	てんとう虫との関わりを通して	園庭で見つけたてんとう虫を育てた。図鑑を見て、アブラムシを食べることが分かると、毎日一生懸命探した。ケースの中が汚れてくると、「いえのなかをきれいにしてあげようよ」と、進んで掃除をしようとする子もいた。てんとう虫が卵を産み、卵がかえると、誕生をとても喜び、誕生日会を開いたり、成虫になるまでの様子を虫眼鏡を使ってじっくりと観察したりし、子どもたちにとって身近な存在となっているようだった。また、この経験がつながり、亀の飼育の場面では、水が汚れていると積極的に掃除をしたり、餌を食べる量の変化等にも気付いたりしていた。日々の生き物との触れ合いを通して、命あるものを大切に育てようとする心が育まれているように感じる。	保育室に、虫の図鑑や絵本（自然）を置いていたことで、気になったことを調べることができた。
3	県央	幼複合	環境	「夢ある未来プロジェクト」花の植栽	厚木市農協の企画「夢ある未来プロジェクト」として地域の運営委員を通して花の苗を提供いただいた。 園児と教師で園庭にある花壇を整備し、相談しながらビオラやパンジーなど、色とりどりの花の苗を花壇へと植えた。水やりをしたり、枯れた花びらをとって色水にしたり、植物へのいたわり、いのちの大切さについても伝えながら、楽しみながら花のお世話をしている。	
4	県央	幼複合	環境	チューリップの球根植え（栽培）	チューリップの球根を一人１ヶずつ、クラスのプランターに植えた。春になって様々な色の花を咲かせてくれる日を楽しみに水やりなどを行い、成長を楽しみにしている。	

5	中	年長	環境	虫の飼育	見つけた虫を「クラスで飼う」と虫かごに入れては、次々に教室に並べるが、かごに入れているだけなので、次々に死んでいった。先に飼っている生き物にも、段々と興味を示さなくなる。そこへカマキリの赤ちゃんを多数いただいた。「飼いたい」という声が上がっていたが、すぐに飼うのでなく、クラスで話し合いの場を設けた。そこで、既に飼っている生き物の世話も出来ていないことも触れた上で、再度、飼うかどうか、飼うならどうしたら良いかを問いかけた。中には「かわいそう」「世話が出来ないから飼うのはやめよう」と言う声もあがったが、多くの子らが、「それでも飼いたい。どうしたら、お世話を忘れないか考えよう。」とカマキリを含め、クラスの生き物の飼い方や世話の仕方をお互いアイデアを出し合い、取り組みだした。この対話が、生き物を大切にする気持ちに気付く良い機会となった。	
6	中	年長	環境	「虫の飼育を通して」	園庭のプランターでツマグロヒョウモンの幼虫を見つけた。昨年も飼育した経験から今年も飼育をしたいという子どもたちの思いを聞き、クラスで飼育をすることにした。飼育ケースで飼育をした経験はあったが、自然と同じ環境で観察をしてみたいという思いから、プランターのまま飼育をすることにした。そのままでは逃げてしまうので、網で囲いを作った。テラスに置くことで、毎日、花に水やりをしたり、幼虫の観察をしたりすることができた。さなぎになると風で落ちないようにプランターの置く場を考えたり、静かに観察したり配慮する姿があった。幼虫からさなぎになる過程や羽化した姿を見ることができた。命が産まれる瞬間に立ち合い、その過程を知ることで命の素晴らしさや大切さを学ぶ経験になった。	
7	中	年長	環境	お米を育てよう	５月に田植えを行った。泥の感触や冷たさに新鮮さや気持ちよさなどを感じながらも「植えるのって大変だな」という声が多くあがった。10月には地域の方に教わりながら鎌を使って稲刈りをした。刈った稲一束で茶碗一杯分になることや、普段何気なく食べているお米の状態になるまでには体験した田植えや稲刈り以外にも多くの工程があり、食べ物を美味しく食べるまでにはこんなにも大変なのだということを知った。その体験から普段大変な思いをして大切に育ててくれている人がいるから美味しく食べることができているということ、だから自分たちは成長することができ、健康に過ごせているんだということを感じる姿が見られた。また、食べ物を大切に食べようという姿につながった。	
8	中	年少	環境	アゲハの幼虫の飼育	虫探しをしていると、葉の上に青虫を見つけ、「大きくなるとどうなるの？見たい」と言い、世話をすることにした。毎日観察をしていると、葉を食べたことで便が出ることや幼虫がどんどん大きくなっていくことに気づく姿があった。また、中には、幼虫のまま死んでしまう虫もいた。死んでしまった幼虫を見て「ご飯食べたのにどうして？」と疑問をもつが分からず、外で生きている虫はそういうこともあると話をすると、同じようにご飯を食べていても死んでしまうことがあることを知り、優しく触れようとする姿に繋がった。蝶になると「蝶になった」「青虫から本当に蝶になるんだね」と言って喜ぶ姿や「外でたくさん飛んで遊んでね」と言い飛んでいくのを嬉しそうに見送る姿が見られ、小さな幼虫から大きな蝶へと生長していく過程に驚きと喜びを感じていた。	

9	中	年長	環境	生き物の命のつながりを感じる	夏休み前に、クラスで大切に育てていたカブトムシ。夏休み明けに幼児らが飼育ケースを開けると、カブトムシはいなかった。カブトムシは夏休みの間に死んでしまったので担任が土に埋めたことを伝えた。幼児が「まだ生きているのがいるかもしれない」と飼育ケースの土を掘り返すと、小さな幼虫を発見した。なんで幼虫がいるんだろうと疑問に思う幼児らがいたが、別の幼児が「私たちが育てていたカブトムシのお母さんが生んでくれたんじゃない？」と言った。周りの幼児らもそれを聞いて納得していた。担任は、「カブトムシが生んでくれた赤ちゃんを、大切に育てなくてはね」と伝えると、幼児らはそれからもたびたび飼育ケースをのぞき込み、土に霧吹きをして世話をしていた。	
10	中	年長	環境	「カブトムシの飼育を通して」	昨年の年長児から引き継いだカブトムシをクラスで飼育した。夏に成虫になり、毎日ゼリーを変えたり、霧吹きをしたりして大事に世話をしていた。カブトムシの身体の特徴に興味を持ち、図鑑で調べ触って関心を深め、愛着を持ったりする姿が見られた。秋にはカブトムシは寿命を迎え、役目を終えていった。カブトムシがいなくなったあと、小さな幼虫を発見した。カナブンの幼虫だと思っていたが、図鑑で調べてみるとカブトムシの幼虫だったことに気づく。新しい命が引き継がれていることに驚き、大切に育てようと新しい土を入れたり、土が乾かないように霧吹きをした。生き物には寿命があることや新しい命が受け継がれていること、命を大切に繋いでいくことを学ぶ経験になった。	
11	中	年中	環境	生き物の誕生	９月上旬、遊びで使おうとしたカラーコーンに２つの白い卵がついていることに気が付く。潰れてしまわないよう飼育ケースに卵を移し、「ダンゴムシの卵かな？」「アリじゃない？」と、何の卵か想像しながら観察をしていた。しばらくすると卵が動き始め、中からヤモリが出てきた。一つはすぐにかえったが、もう一つは少し出てきているがうまく出てこられないようだった。一生懸命動きながら体についている卵の殻を取ろうとしている姿を見て一人が「頑張れ。」とつぶやくと、それを聞いた周りの子もヤモリを励まし始めた。その日のうちにはうまく出てこられなかったが、次の日に卵から出てきたヤモリを見て「よかったね。」と嬉しそうな表情を浮かべていた。「クラスで飼いたい。」という声が多く聞かれたが、飼育の仕方が分からないと死んでしまうという話をすると翌日、生きた虫を食べる、暗いところが好きなど、ヤモリについて調べて来る子が何人かいた。その子たちのアイデアをもとに、飼育ケースの周りに黒い画用紙を貼ったり、生きている虫探しをしたりしていくと、エサがないと知らせたり、飼育ケースを掃除したり、子ども達なりに世話をしようとする姿が見られるようになってきた。また、その子たちに刺激を受けて他の子も続々と育て方について調べて来るようになり、互いに良い刺激を受けながら、生き物を大切に育てようとする気持ちが芽生えていった。	

12	中	年長	環境	蚕の命について	５月に蚕種を購入し、飼育を始める。誕生の瞬間や、脱皮や餌を食べる様子を見ながら成長を観察していった。また、図鑑や飼育の本などを使って世話の仕方を自分たちで調べ、飼育環境を整えたり桑の葉を探しに行ったりと、愛着をもって世話をするようになっていった。 ６月下旬に蚕が繭を作り、きれいな繭玉ができたところで、教師が蚕の一生について話をした。自然界にはいない生き物であること、今回は繭のまま一生を終えることを話すと「悲しい」「さみしい」などと泣く子も多く、蚕を大切な生き物として意識していた様子がうかがえた。教師も子ども達が大切に育ててくれたことや愛情を持っていたことなどを十分に認め、気持ちを受け止めていく。子ども達も、蚕が一生をかけて作ってくれた繭ということを感じ取り、「この繭は大切に使おう」と、クラスで蚕への気持ちを共有していった。	
13	中	年長	環境	年少さんに教えてあげよう	年長児が飼育しているカメの水槽に、４歳児が花や砂を入れることが続いた。その度に年長児が取り除き、水を入れ替えていた。ある日、水槽内の大きな石がカメの顔に寄せられて首が動かせない状態になっているのを見つけた。「痛かったよね。」「苦しかっただろうね。」と大騒ぎになった。どうしたらよいかクラスで話し合う中で、「石を無くす？」「でも甲羅干しができなくなるよ。」等のやり取りの後「まずは見つけたら教えてあげよう。年少さん、きっとわからないんだよ。」という考えが出て、皆が賛成した。その後、今まで以上にカメの様子を気にかけ、何かあると、その都度、「カメさん、痛いからやめてね。」等と優しく伝えるようになった。また年長児の姿がモデルにもなり、年少児のカメへの接し方が優しく変わった。	
14	中	年長	環境	カマキリの世話	バッタやカマキリなど虫に興味をもつ幼児が多くいる。初めは虫を捕まて満足していた子どもたちだが、小さな虫にも命があることの大切さを本や体験を通して知らせていった。カマキリを捕まえて園に持ってきた幼児にどうするのか尋ねると「育てたい」と強い意志を持っていた。小さな生き物にも命があることを繰り返し伝えてきたことで図鑑を見ながら飼育環境を調べたり、餌を毎日の戸外遊びの時間に率先して探したりする姿があった。また、飼育ケースから出し、散歩をさせるなど愛情をもって関わる姿が見られた。その姿に影響された周りの幼児も一緒に餌を探したり、育て方を調べて伝えたりとクラス全体が生き物を大切に扱おう、愛情をもって関わろうという気持ちになっていった。	
15	中	年少	環境	クワガタの世話	２学期が始まり、園にいたクワガタを保護者が捕まえてくださったことをきっかけにクラスで飼うことになった。子どもたちは、時間があると様子を見に行き、毎日、家から果物を持って来る子など、大切に育てようという意識が芽生えているようだった。しかし、10月の下旬、朝にクワガタがひっくり返っているのを見つけた。クワガタが死んでしまったことを理解していない子も見られたため、生き物には命があることを話した。すると、「お墓を作ってあげたい」と言っていたため、みんなで墓を作ることにした。その後も子どもたちは、花を摘んでお供えしていたり、話しかけてあげる様子も見られた。子どもたちは、生き物には命があること、命を大切にすることとはどういうことかを実際の体験の中で感じることができた。	

16	中	幼複合	環境	自然観察を通して、生き物の生態系を守ることの大切さを知る。	講師の方を招き「親子生き物の里調査隊」として、地域の生き物の里でどんな生き物がいるか探し、捕まえる体験活動を行った。親子でドジョウやヤゴ、ザリガニなどを捕まえ、見たり触れたりして楽しむ姿が見られた。また、捕まえた生き物を種類別に入れ物に分け、生き物をじっくり観察する姿も見られた。また、講師の方が捕まえた生き物の名前やドジョウやヤゴは川に戻すが、外来種のザリガニは生き物の生態系を守るために川には戻さないことを教えていただいた。この体験を通して、それぞれの生き物の命を守る方法を知り、地域の身近な自然環境を大切に思う気持ちにつながった。	NPO法人丹沢自然学校所属
17	中	年長	環境	ヤマアカガエル「とくちゃん」のお世話	１１月中旬に足洗い場に紛れ込んできたカエルを子どもが発見した。そこで、クラスで飼育するようになった。子どもたちが自分で飼育することになり、毎日観察をしたり週末には順番に家に持ち帰ったりして世話が始まった。次第に愛着がわき「トクちゃん」という名前をつけた。絵本や図鑑を見ながら餌を探し捕まえたり、飼育ケース内の環境を整えたりして、愛情をもって世話をしていた。 １２月上旬に子どもや保護者から「元気がない」という言葉が出てきたので、クラスで話し合いをした。絶滅危惧種であること、冬眠前に十分な餌をやることができない等の理由から逃がすことになった。絵本や図鑑で逃がす場所を調べ、枯葉や土を集め、隠れる場所や冬眠できる場所を作った。逃がした後、寂しさから涙したり、折り紙でトクちゃんを作ったりと別れを惜しんでいた。	・絵本「生きものつかまえたらどうするの？」（偕成社 文・秋山幸也 写真・松橋利光） ・図鑑「しいく・かんさつ図鑑」（チャイルド社　監修・高家博成、今泉忠明、武田正倫）
18	中	年少	環境	どんな花が咲くかな	一人一株、好きな色を選んでチューリップを育てることにした。一つのプランターに四人ずつ植えたことで自分のチューリップだけでなく、友達のチューリップの生長にも興味が持てるように工夫してみた。 友達のチューリップの芽が出始めたのを見つけると、「〇〇ちゃんのチューリップの芽が出ていたよ」と教えたり、「僕のはいつ芽が出るのかな」と心配そうに毎日眺めたりしている姿が見られた。芽が出ている子は自分のチューリップの芽を優しく指でなでている姿があり、可愛いと感じたり、親しみをもってかかわろうとしたりする様子が見られた。	チューリップ球根
19	中	年長	環境	バッタを飼おう	バッタを捕まえ、虫かごに入れる。飼いたいという気持ちがあったので、飼うために何が必要なのか考えていけるように投げかける。図鑑を見ながら飼育ケースの中に必要な物や、何を食べるのかなど調べる姿が見られた。毎日、餌を探し、週末は多めに餌をあげたり、家庭からも餌となる野菜をもってきたりするなど、愛着をもって世話をしていた。１１月初めまで世話をしていたが、冬の間は生きられないことを図鑑で知ると、「かわいそうだから、逃がしてあげよう」と命あるものとして、いたわり、大切に関わる姿が見られた。	つかまえたら どうする？

20	中	年少	環境	カブトムシの世話を通して	クラスでカブトムシを飼育していた。子どもたちはカブトムシが食べる物について図鑑で調べて餌をあげたり、観察をしたりしていた。しかし２週間後にカブトムシが死んでしまった。そのため、クラスでカブトムシが死んでしまいもう戻ってこないことを伝えると、「逃がしてあげれば良かった。」と悲しむ様子が見られ、死んでしまったカブトムシを埋めてあげたいという思いをもった。そこで、埋める場所を投げかけると、「踏まれたら痛いよね」「踏まれない場所がいい」との意見が出て、木の根元に埋めた。その後も、虫捕りを楽しむ姿が見られていたが、この経験を通して虫を捕まえても「逃がしてあげよう」「元気でね」と話し、虫を逃がすようになった。その姿から命を大切にする気持ちが育まれているように感じた。	昆虫図鑑を用いてカブトムシの生態や食べる餌を調べていた。
21	中	幼複合	環境	飼育栽培	４歳児がチューリップの球根植えを行った。夏に朝顔やふうせんかずら、ひまわりなどプランターでみんなで植物を育て、大きくなって種を取る経験をした。今回は、自分の植木鉢に育てたい色の球根を選び植えた。球根を植える時に「玉ねぎみたい」「とんがっているから、上かな？」と球根をよく見て植えていた。土をかける時に保育教諭が「土のお布団はふんわりかけてね」等と話すと「温かいお布団かけてあげるね」「やさしくね。ふんわりね。」と話しかける姿も見られた。また翌日には「いつ花が咲くの」と生長を楽しみにしたり「お水あげるんだよね」と毎日水やりをする姿も見られた。中には、水をあげすぎて水たまりになってしまった子もいて「水が多いとだめだよ」「苦しくなっちゃうんだよね」と子ども同士で話す姿も見られるようになった。球根を植えてから数カ月が経ち芽が出てくると大喜びであった。また、落ち葉を置いたり、白砂をかけたりする子もいて、「どうして？」と聞くと、「寒いからお布団かけてる」と言っていた。一つの球根を大切に育て、生長の変化に気付くようにもなってきている。チューリップという身近な植物の生長に触れ、命あるものとして大切にしたいというと心が育ったと思う。	月間絵本付録「はる・なつの図鑑」 図鑑「はるのはなとむしずかん」
22	中	年少	環境	わけてあげよう	園庭でカマキリとシジミチョウを捕まえた園児がうれしそうに飼育ケースに入れ、周囲の友達に見せている。するとそのうち一人の幼児が「でもさ、一緒に入れてるとカマキリにねらわれちゃうかも？」と話す。それを聞いた幼児も「うんそうだよね…」「きっとねらわれちゃうよ！」「どうする？」「どうしようか？」「にがす…？」「せっかくつかまえたのに～」「それなら、もうひとつのいれものにわけてあげようよ！！」「うん、いいね～」「そうしよう！」などと、みんなで話をし、もうひとつの飼育ケースにわけて入れることとなった。友達とのかかわり通して考えを出し合い、虫のことを考え、生命を大切にしようとする気持ちが育った。	

23	中	年中	環境	セミの命を大切にしたい	園庭でセミを捕まえて、大切に飼育ケースに入れ持って帰ることを楽しみにしていた。部屋でしばらく観察していると、弱ってきているセミがいることに気が付いた。「セミがかわいそうだから逃がしてあげよう。」「いいね。」と子ども達で話し合い、逃がそうとすると「僕のセミは一匹は弱っているけど、もう一匹はまだ元気だから大丈夫。」と言う子がいた。外に行き、一匹ずつ木に逃がしてあげると「元気でね！」「ばいばーい！」としばらくじっと見て見送っていた。元気だと言っていたもう一匹のセミは、家で家族の人に見せた後、すぐに逃がしてあげたそうだ。命を大切にする方法は一人一人違い、友達から学ぶ姿が見られた。自分なりに考え、命を大切にしようとする姿が育った。	
24	中	幼複合	環境	ここあちゃん(ウサギ)がいない	休日明けの登園時、園で飼育していた２羽のウサギの内１羽が居ない事に園児が気づく。花が手向けられたケージを見て、何だろう？どうしたの？との疑問の声が数人の園児から聞かれた。その後、子どもたちと職員で集まり、休み中に死んでしまった事を丁寧に伝えた。すると、なんで？という疑問や死んでしまった事を悲しむ声とここあとの思い出を話す声が聞かれた。そして園庭の花や草を束ねてケージに手向けたり、自筆の絵やメッセージ「だいすき」「タンポポの草すきだよね」「またいつでも来てね」等を飾り、感謝の思いを表していた。園児たちは自らの方法で生命との別れの受け止め方を表現していて、それは保護者へも広がりしばらくの間、追悼と感謝の声が聞かれた。	
25	県西	幼複合	環境	可愛いお客様との出会い「ツバメの訪問を通して」	毎年、酒匂幼稚園のピロティには可愛いお客様が訪れる。今年も５月頃から、親ツバメが元気よく飛び回る姿が見られるようになると、所々に巣が作られ始め、日毎に大きくなっていく様子がわかる。子どもたちも登園時や園庭に出る時にピロティの下を通ると、上を見上げて観察していた。ある日、ピヨピヨと可愛らしい鳴き声が聞こえ始めた。卵から雛が孵り「あっ！赤ちゃんツバメがいるよ！」「生まれたんだ！」と喜ぶ幼児。そのうちに子ツバメが親ツバメからエサをもらうために必死に口を空けている可愛らしい姿が見られるようになった。子ツバメが大きくなるにつれ、巣が手狭になっていき、一羽の子ツバメが地面に落下していた。「赤ちゃん落ちちゃった！可哀そう。」と悲しそうにしていると「そうだ！お家を直してあげようよ！」という言葉が多く聞かれた。巣をどうやって直そうか？」と考えていると「ラーメンのカップみたいなので作るのはどう？」というアイデアが出た。早速カップを用意し、巣の周りにボンドとガムテープでカップを付け補強した。また、万が一落下しても怪我をしないように安全なハンモックも用意し園長が脚立に上がり作業していると「園長先生気を付けてね！頑張って！」「ツバメちゃんが喜んでいるよ！」と応援団が揃ってエールを送ってくれた。「これでツバメちゃん落ちないね！」とみんなで喜びあった。それから暫くしてツバメは成長し飛べるようになって大空へ飛び立っていった。命の大切さを学ぶ大きな出来事だった。	

26	県西	幼複合	環境	ツマグロヒョウモンの飼育を通して	春、色とりどりのパンジーの花の中から、子どもたちが黒いものを発見した。図鑑で調べてみると、『ツマグロヒョウモン』の幼虫だということが分かり、蝶になるまで部屋で飼育することにした。毎日観察することが日課になった子どもたち。「とげとげしてるね。」「どこに顔があるのかな？」などと飼育ケースを覗き込んでは友達と感じたこと、疑問に思ったことを伝え合う様子が見られた。その後、幼虫がさなぎになっているのを発見し「キラキラしてるよ！」「こっちにも！こっちにも！」と自然の神秘を感じながら嬉しそうに報告してきた。そして数日後、さなぎは殻を破りきれいな蝶になった。蝶になった後、どうするかみんなで話し合ったところ「飼育ケースは狭いから逃がしてあげよう。」「エサが食べられないしね。」と外に逃がしてあげることに。園舎の２階まで高く飛んでいく蝶を見て「元気でね～。」といつまでも手を振る姿が見られた。実体験を通して、命の営みや自然の不思議さ、美しさなどに気が付いた様子だった。	
27	県西	年長	環境	飼育物を通して、命について考える	１１月下旬、一人の幼児が持ってきた川魚を幼稚園で育てることになり、魚の名前や特徴を紙に書いてみんなが分かるようにした。飼育環境が整っていなかったため、クラスの代表者２名が水草を買いに行ったり、金魚のエサをあげたりしながら世話をしていた。 ある朝、登園すると魚が１匹死んでしまっていることに気付き、世話をしていた数人で死んでしまった魚をどうするか話し合いをした。「元の川に戻してあげたい。」、「お墓をつくってあげる。」など子どもたちなりに考え、最終的にお墓をつくってあげた。そして、踏まれないように目印を置いた。この出来事をクラスの集まりの時間に、クラス全員に知らせた。すると、「私も生きているところ見てたよ。」、「死んじゃったね。」、「お墓の所、踏まないように気を付けるね。」という言葉が聞かれ、川魚の死について考えている姿が見られた。人間以外にも命があることや生き物を大切に思う気持ちが育っていると感じた。	
28	県西	年少	環境	栽培物を通して、命について考える	９月にサフランの球根を植える。１１月後半になり、何名かは花が咲き、持ち帰りをした。しかし、大半の幼児のサフランは花が咲かず花芽もない状態だった。そこで教師が、今後花をどうしていくか幼児に聞くと、「持ち帰りたい。」「そのまま園で育てたい。」という意見が出た。花にも命があると感じている幼児は、『そのまま咲かないのは可哀相だから花が咲くまで待ちたい』という気持ちをもっていた。最終的に、自分の花は家に持ち帰り、園用のサフランを冬野菜を育てている畑に植えることになった。土が乾かないように毎日水やりをしたり、『きれいな花が咲きますように』と声を掛けたりして、サフランが咲くことを楽しみにしていた。花や草は動物のように動く命のあるものではないが、子どもたちの中には、花にも命があり大切に育てていこうとする姿が見られている。	

29	県西	年長	環境	年長児としての心の育ち「カメの飼育を通して」	酒匂幼稚園に２匹の可愛いカメがいる。毎年、年長児の当番活動として行っている。年度末になると、年長児が年少児に丁寧に世話の仕方の引き継ぎをしてくれるので、年少児は年長児になると「カメの世話ができる！」と年長児への進級に期待が膨らむ大きな事柄になっている。年長児になると、進んで「今日は僕たちのグループがカメのお世話をする日だ！」と自分たちで役割を話し合い、カメの甲羅や、タライ、中の石をブラシで洗い、最後にエサをあげている。「きれいになったね！」「ご飯だよ！」と自然に優しい言葉をかける姿があった。当番活動を楽しみにしながら、友達と力を合わせる姿に心の育ちを感じた。	
30	県西	幼複合	環境	飼育活動	年長児が育てているニンジンの葉を、たくさんの幼虫が食べているのを一人の子が見つけた。早速虫かごに入れクラスで飼育することになった。幼虫は２つに分けて、年少児にも見える場所にも置くことにした。図鑑で調べると”キアゲハ”の幼虫であることがわかった。幼虫は野菜の葉を食べることを知り、家からキャベツをもって来たり、畑にニンジンの葉を取りに行ったり、大切に育てていた。飼育活動の中で、幼虫は脱皮をして大きくなること、蛹になる時に糸を出すこと、蝶になるまで時間がかかることを、実体験を通して学ぶと共に、生き物を育てることの喜びを感じることができた。	小学館の図鑑NEO 「飼育と観察」
31	県西	年長	環境	日本の行事や風習に触れる	「秋分の日」とは何か、クラスで聞いてみた。知っている幼児はほとんどなく、経験のある幼児からは、「お墓参りをする日。」という答えが聞かれ、実際にお墓に行った話が出てきた。その話から、「お墓参りって？」「何をするの？」と想像を膨らませている幼児の姿を見て、『いのちのまつり』の絵本を読んだ。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん・・・とたくさんの”いのち”がつながっているということがわかり、”いのち”や”家族”について考えるきっかけになった。	いのちのまつり 「ヌチヌグスージ」 作：草場　一壽 絵：平安座　資尚
32	県西	幼複合	環境	カエルちゃん、大きくなってね。	園庭で３匹のカエルを見つけた男児。「このカエル、お部屋で飼いたい。」と友達に提案したことからカエルの飼育が始まった。飼育するにあたって、カエルは何を食べるのかを調べたところ『生きている虫を食べる』と知り、子どもたちは「えっ‥」と驚き固まっていた。最初は虫を与えることに抵抗を感じていた様子だったが、カエルへの愛着が湧いてくると『カエルのために』と、虫探しを積極的にするようになった。戸外に出るとすぐに網を持ち１時間近くカエルのエサ探しをする日が続き、虫を食べる様子を嬉しそうに見ながら「大きくなるんだよ。」と声を掛ける姿も見られた。「虫さんは可哀想だけど、カエルちゃん大きくなって欲しいな。」と、命が巡っていることを子どもながらに感じる様子が見られた。	
33	県西	年少	環境	カラスの泣き声	時折、大きなカラスが園庭に舞い降りたり、「カァ、カァ」と大きな鳴き声が聞かれたりすることがあった。 ある日、園庭で遊んでいるときに、カラスがいつもよりも激しく「カー、カー」と鳴き、遊んでいた年少頭上を飛んでいったことがあった。「うるさいなぁ。」「でもね、カラスもお腹がすいてるんだよ！」「あっ、そうか…。」と、カラスの鳴き声について話をしている子どもたちだった。	

34	県西	年長	環境	卵なの？	飼育しているカメの飼育容器の中に、白い塊があった。容器を掃除するときに気付き、「これなんだ？」と不思議そうな幼児たち。飼育ケースに水コケを敷き、そおっと置いた。その後、卵であることがわかった。 そのようなことが３回続いたが、卵は孵らず、変化はなかった。カメは卵を生むこと、有精卵と無精卵があることを知り、小さなカメが生まれてくることを楽しみにしていた年長児は、担任と一緒に園庭の端に穴を堀り、卵を埋めてあげることにした。	
35	県西	年中	環境	クロアゲハの幼虫の変化	畑でアゲハの幼虫を見つけ、飼育をすることにした。葉を食べる様子、糞をする様子、糞の大きさ等毎日観察することで初めての発見をし、親しみが出てきた。段々と動かなくなる様子に心配していると、サナギになろうとしていることが分かった。ある日、登園した幼児はアゲハとなってケースの中で飛ぼうとしている姿を発見し、大喜びした。このままケースの中で飼いたいという幼児もいたが、「せっかくチョウチョになれたから、大きな空に飛ばしてあげたいな。」という教師の考えも伝え、空に離すことになった。「元気でね。」「たくさんご飯食べてね。」等別れの言葉を伝えながらクロアゲハの旅立ちを見届け、学級のみんなで成長の喜びや驚きを共有することができた。	
36	県西	年少	環境	小さい命	捕まえたチョウを虫かごに入れていると、だんだん弱ってきたことに気付いたＡ児。「狭いのかな？」「疲れちゃったのかな？」と自分なりに考えて逃がすことにした。チョウを園庭の花壇の近くで逃がし、飛んでいくチョウに「またね。」と言っていた。	
37	県西	年中	環境	小さな虫の命	５月頃からアリやダンゴムシに興味をもち、探す姿があった。アリが巣穴の中に入るのを見つけると、指や土を入れ巣穴が壊れることが何度かあった。巣穴の中でアリが暮らしていることを知ってほしいと思い、アリの巣キットを使ってアリがどのように巣を掘っているのかを観察することにした。子どもたちは、アリが一生懸命に砂を運んだり、頭をつかって砂のなかに入ったりする様子が見られるようになると「アリってすごいね！」「がんばれ！」と声をかけていた。その経験から、アリを見つけると踏まないように注意したり、巣穴の中に葉っぱや砂が入らないようにしたりする姿がみられた。生き物に対して、感情が芽生える機会になった。	アリの巣キット （ふしぎの国のアリのすハウス.Gakken）
38	県西	年長	環境	命を大切にする心	うさぎとカメの飼育を２人組で行っている。年長になった当初は、「触れないからやって。」と言い、糞の掃除をやりたがらない幼児もいた。しかし、毎日くり返し飼育物の世話をしてきたことで、10月頃になると「私がお世話をしてあげないと。」「私がきれいにしないと死んじゃうからやらないと。」と、うさぎの気持ちになって取り組むようになった。また、動物に対しての話し方もやさしい口調で「今からきれいにするね。」と声を掛けながらうさぎやカメに親しみ、いたわり、生き物の命を大切にする心の育ちを感じる。	

39	県西	年長	環境	弱ったメダカへの思い	クラスで飼育しているメダカのうち、１匹のメダカの泳ぎ方や体の形が少しずつ変わり弱っていることに気づいたＣ児。そのことに気付いてからは毎日メダカの観察を始め、ちょっとでも変化を見つけると保育教諭や友だちに知らせていた。餌をあげる時も小声で「頑張れ！頑張れ！」とつぶやきながら様子を見守り、メダカが水槽の底で泳がず口をパクパクしていると「泳ぐのもゆっくりでいいよ。休憩してね。」と優しく声を掛ける姿も見られた。ある日、ついにメダカが死んでしまうと「頑張ったんだね。」と優しい言葉を掛け、最後まで寄り添っていた。普段生き物の飼育を進んで行うことのないＣ児だが、保育教諭がメダカに話しかけたり餌をあげたりしていると、様子を見に来ることが度々あった。今回の出来事では毎日様子を見守るなど積極的に行動する姿が見られ、Ｃ児の中でメダカに対する思いが少し変わっていたように感じる。メダカの小さな命をしっかりと認識した上でのかかわりだった。	
40	県西	年中	環境	栽培物を育てよう	クラスで、夏野菜や冬野菜の栽培物を育てている。年長児から「草をむしるよ、水やりをするよ。水は葉っぱにかけるとよくないよ。」など教えてもらったことを守って、世話をする子もいれば、あまり関心をもたない子もいる。その都度、「お世話をしないと野菜はどうなってしまうかな？」とクラスの集まりの中で知らせてきた。話した後は進んで世話をするが、続けていくことが難しい。ただ、クラスで冬の花であるヒヤシンス（２球・水栽培）の成長を見守ると、毎日「少し（芽が）大きくなってる」「紫っぽいかな？」「水が少なくなってきてるから、増やそうよ」と子どもたちから気づいたことを伝えてくる姿が見られた。ヒヤシンスのように、栽培物に対して子どもたちの興味関心が高まるように、教師も声をかけたり子どもたちの気づきに共感したりして過ごしていきたいと思った。	
41	県西	幼複合	環境	「きょうりゅうちゃん・こうらちゃん」の冬眠	トカゲの“きょうりゅうちゃん”や亀の“こうらちゃん”が動かないことに気づいた12月某日。昨年の経験から“寒くなると冬眠する”ことを思い出し『冬眠大作戦』が始まった。 冬眠とは？どこで？様々なことを考え、「寒いところ」「暗いところ」「静かなところ」を探すことになった。園舎内に条件を満たすところが見つからず悪戦苦闘。その後園舎裏の倉庫を候補地に…そして場所が決定。更には飼育ケースが入る段ボールを探す子、図鑑を見て落ち葉が必要なことを知り園庭で集める子、みんなが分かるように段ボール箱に生き物の名前を書く子とそれぞれが必要なことを考え行動した。最後は皆で「おやすみ、ゆっくり寝てね」と倉庫のドアを閉めて作戦が終了した。	
42	県西	年長	環境	栽培活動を通して	１学期にかぼちゃの種蒔きをした。水やりをしたり、草むしりをしたりして世話を続けてきた。２学期になり、かぼちゃが大きくなり、収穫の時期を迎えた。大きなかぼちゃの葉の間から「かぼちゃ見つけた！」と嬉しそうに声をあげるＡ児。ハサミでツルを切り収穫をしているＡ児の後ろで、自然と手を叩いて喜ぶＢ児。かぼちゃの収穫を心から喜んでいる姿は、生命の誕生を喜んでいるかのようだった。	

43	県西	幼複合	環境	大好きなトカゲのはっちゃん	幼稚園の砂場にはトカゲがたくさん住んでいる。虫や生き物に興味のある子ども達はトカゲを見つけ大喜びで捕獲を始めた。自分で捕まえたトカゲを飼いたくなり、図鑑で調べ水槽に砂を入れてお家を作る。しっぽがくるりと8の字に見えたことから”はっちゃん”と名付け飼育を始めた。餌になる虫を採ったり水を入れたりと保育者と一緒に世話をした。虫が苦手だった子も他の友達がしているのを見て触れるようなる。毎日かわいがっていたはっちゃんであったが上手に餌が食べられなかったのか…ある朝死んでいることに気付く。死んでしまったはっちゃんをいつまでも愛おしくなでる子どもの姿があった。	
44	県西	年長	環境	さつま芋を育てよう	畑で夏野菜を育てた経験から、秋に旬を迎える野菜は何か相談し、さつま芋を植えることになった。農業をしている保護者に畑では栄養が豊富すぎてうまく育たないとのアドバイスをもらい、自分達で知恵を絞り、園庭の端にある決して日当たりがよいとはいえない荒れたスペースを選び、開墾が始まった。掘るとゴロゴロと大きな石や太い木の根が出てくるような場所であったが、子ども達にとってはそれがとても新鮮で、毎日時間をかけ一生懸命開墾していった。頑張ったかいあって荒れ地だった場所が立派な畑になり、そこに待ちに待った苗を植え、収穫の時を楽しみに待った。夏になり葉が生い茂り、遠くからでもさつま芋の成長ぶりわかり、期待が高まった。11月、収穫の時期を迎え、クラスでさつま芋堀を行った。残念ながら大収穫とはいかなかったが、採れたさつま芋は給食室で調理してもらう。「甘くて美味しい。」「他のクラスにも食べてもらいたい。」と収穫を喜び合いながら味わうことができた。	
45	県西	年長	環境	オタマジャクシの飼育	毎年小学校のビオトープへオタマジャクシを捕りに行っており、今年はその経験を活かし、捕まえる方法や使う道具など、必要な事を子どもが考えて行うようにした。ビオトープに着くと早速開始。意気揚々と捕まえに行くが、池の真ん中や深い所へ次々と逃げてしまい、全く捕まえられなかった。落胆する子ども達であったが、諦めず園に戻って道具を改良し、再度挑戦する。遠くにいるオタマジャクシも捕まえられるようにしたので、ようやく捕まえることが出来た。みんなで知恵を絞り、苦労して捕ったので思いも一入である。登園するとすぐに水槽に張りついて様子を確認し、ある子は飼育の図鑑を見て、水の深さ、餌の種類など飼育に必要な事を調べている。またある子は家庭で話をし、餌を持ってくる子どももいた。大事に育てた結果、足が生え、手が生え、ようやくカエルになった。カエルになった喜びや、これまでの関わりの中で愛着が湧き、飼い続けたい思いがあった。しかし、飼うためには「生きている虫」が必要で、毎日用意することが容易ではないことが分かり、「カエルもお腹が空いて可哀そう」という声が上がってくる。みんなで話し合い、元のビオトープや小学校の草むらに戻すという決断をした。カエルを返しに行く日は小雨が降っていたが、「カエルさんは雨が嬉しいんじゃない？今日が良いよ。」と最後までカエルの気持ちに寄り添う姿があった。小さな命を大切にしようとする気持ちが育まれた。	

46	県西	年長	環境	マリーゴールドの育成	地域の植物園との連携の一貫として、４月マリーゴールドの種植えの経験をすると、種の繊細さ、小ささに驚きながら、一つ一つの作業を丁寧に行っていた。温床を借りて保育室で育てるようになると、水の与え方を教わった子どもたちは枯らさないために水をあげすぎないようにしていた。マリーゴールドの芽が出ると、「芽が出てきたよ。」「こうなってるね（曲がっている）。」と芽が出たことを喜び、植物の育っていく変化に気付いた。同じ方向に芽が曲がっていることに面白さを感じ、不思議に思い、保育教諭が「太陽のお日様の方を向いて曲がってるんだよ。」と伝えると、友だち同士で教え合う姿があった。芽が出ると、自分専用のペットボトルジョウロを作った。「僕の元気がない…」と気付き、Aはその日から毎日水をあげていた。マリーゴールドをポットからプランターに移し、園庭で育てると「僕の咲いてる！」「一番（よく）咲いてる！」「なんか面白い色。」とマリーゴールドの花が咲いたことを嬉しそうにしていた。マリーゴールドの育ちの中に、「種植え」「苗の移し替え」「水やり」「植物園へのお礼の絵描き」「花びらを使った色水遊び」「種摘み」「染物」と７ヶ月の間のマリーゴールドの一生を共に歩んだ子ども達は様々な事象を体験し、植物を大切に思う気持ちが育った。	
47	県西	年中	環境	ヤモリの「いろな」	年中児が園庭でヤモリを見つけた。大きくて丸々としたヤモリだった。捕まえてきて飼いたいということになった。「何を食べるんだろう。」「おうちの中は何を入れればいいのかな？」相談していると年長児が飼い方の載っている図鑑を持ってきてくれた。その日から図鑑を見ながらの世話が始まった。「ヤモリはいろいろな虫を食べるんだって。」ということで「いろな」と名づけられた。毎日園庭で赤ちゃんコオロギや小さなクモをを採ってはせっせと世話をする姿が見られた。秋が深まるにつれ餌の虫が少なくなってなかなか見つけられなくなり買ったミルワームを入れるようになった。いろなは臆病でミルワームを怖がりどんどん痩せてしまった。寒くなり外に逃がすこともできないまま、いろなは動かなくなってしまった。悲しむ子、あまり気持ちを表現しなかった子と様々だったが話し合って皆でお墓を作ることになった。何か月たった今もお墓にお花を手向ける子ども達の姿がある。小さな命から命の大切さを学んだ。	
48	県西	年中	環境	カブづくり	春にはジャガイモ、夏にはミニトマト、秋にはサツマイモなど幼稚園では季節によって育てやすい野菜を畑で育て、収穫して食べている。今年も数種類の野菜を育ててきた。好き嫌いをする子が多い年中組の子たちは栽培にあまり興味を示さない様子だった。そこで、興味が持てるようチューリップの球根を個人持ちの鉢に植え、それと同時に年中組クラス専用のプランターに生長がはやい小カブの種を蒔くことにした。皆で種を蒔いているときに風が吹き、種の入っている袋が飛んで種がこぼれた。慌てて皆で小さな種を一生懸命拾ってプランターに蒔いた。カブは面白いほど早く芽を出し、ぐんぐん大きくなった。チューリップも芽を出した。子ども達は生長するカブを大事に育てるようになった。それと同時にチューリップの鉢の中で何故か小カブの葉っぱも大きくなっていく。風のいたずらで子ども達の鉢にもこぼれ落ちていたのだ。そのことで更に生長に興味が現れていった。1月、皆で収穫し食べた。きっと次に植えるジャガイモにも興味を示すことだろう。	

49	県西	年長	環境	残さず食べる理由	昼食の時間に幼児が、「どうしてごはんはなるべく残してはいけないの？」と訊ねてきた。そのことをきっかけにクラスで話す場を設けた。「おかあさんが悲しむから？」「栄養をとると体が元気になるから。」など様々な意見が挙がった。子どもの意見を交えながら、本を用いて知ることができるようにした。残さず食べると、自分の体も、生産者や作ってくれた周りの人も嬉しい・ゴミや余分な水も減って地球に優しいことが分かった。このことからコンポストで土づくりをしたり、下水処理場の見学など様々な活動に展開した。	書籍「なぜなにSDGｓ」世界文化社
50	県西	年中	環境	バッタ・クビキリギスの飼育	捕まえて飼育していたバッタとクビキリギス。ある日、一番大きなバッタ(バタコちゃん)が卵を産んだ。すると、みるみるうちに元気がなくなり死んでしまった。図鑑で調べ、バッタは越冬せず卵を産んだら死んでしまうということを知る。クラスの中で自然に返してあげようという意見と最後まで育てたいという意見が分かれる。次第に元気がなくなっていく姿を見て「見つけた所に返してあげよう」ということになった。最後は、卵は大事に育てるね・また会おうねと、お別れを言った。卵が孵化することを期待している。命の尊さを感じられた体験となった。	「飼育と観察百科」世界文化社 「しぜんずかん」学研